

氏名	渡邊 愛
ヨミガナ	ワタナベ アイ
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博音第271号
学位授与年月日	平成28年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 リュック・フェラーリの電子音響作品における逸話の構造

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	西岡 龍彦
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	亀川 徹
（副査）	東京藝術大学	准教授	（音楽学部）	丸井 淳史
（副査）	東京藝術大学	准教授	（音楽学部）	福中 冬子

（論文内容の要旨）

本論文は、20世紀フランスの作曲家・リュック・フェラーリ Luc Ferrari (1929-2005)の提唱した逸話的音楽の定義を問い直し、その特徴を明らかにすることを目的とする。

ミュージック・コンクレートの黎明期である1950年代にピエール・シェフェール Pierre Schaeffer (1910-1995)の誘いでスタジオ内での録音による作曲をはじめたフェラーリは、60年代のはじめになると自然環境や社会の様相をマイクで採取し、音素材の意味内容を露わにした作品を創作する。そしてそのような作品のスタイルを逸話的音楽と呼び、シェフェールの推進していた抽象化された音響オブジェによるミュージック・コンクレートとの差別化を図った。ミュージック・コンクレートと逸話的音楽にはどのような違いがあるのか。そしてそもそもその二者は対立しているのだろうか。すなわちこの研究の背景には、電子音響音楽分野、なかでも録音された音を用いて作曲されるミュージック・コンクレートにまつわる諸概念に対する問い直しも含まれている。

本研究では逸話的音楽の定義をフェラーリの音楽経験やミュージック・コンクレートの再確認、そして70年代以降のヘルシュピール（ラジオドラマ）の仕事に照らすことで検証し、逸話的音楽の特徴を総括する最晩年の2つの作品《逸話的なものたち Les Anecdotes》と《パリー東京ーパリ Paris-Tokyo-Paris》の分析を通じてその特徴を考察する。これは電子音響音楽の包括的研究の中で逸話的音楽について深く掘り下げた例がいままで非常に少なく、またフェラーリ研究という枠組みのなかでは作曲家の人間像や文化的視点を射程に置いたものが多勢であり、楽曲分析を中心に据えた論がほとんどみられないことを反省した上での手順である。分析では、その構造分析に草稿および制作段階におけるオーディオ編集ファイル（編集用ソフトウェア・Pro-Toolsのセッションデータ）を用いる。このファイルはリュック・フェラーリ自身が直接作曲・編集作業を行った一次資料である。この方法には、電子音響分野の分析の可能性として作曲者のDAW環境における編集データを観察し、制作プロセスを紐解く手続きの提案という意図も含まれている。

第一章では、若きフェラーリの、器楽を出発点とした音への対峙とシェフェールとの出会い・GRMでの録音経験で培われた実験精神・映画の方法論から得た知見が、逸話的音楽への眼差しを示したことを指摘する。特に映画との類似点は素材や編集＝作曲における姿勢に示唆を与えた。

第二章では、逸話的音楽における処女作《異型接合体》を軸にミュージック・コンクレートについて再考する。ミュージック・コンクレートと同伴する概念である還元的聴取を引き合いに出しながら逸話的音楽成立の論理構造を読解した結果、ミュージック・コンクレートは素材の抽象性と表意性の両方を潜在的に抱えていることが検証された。我々はこの「意味を取る聴き方」を物語的聴取と名づけ、物語的聴取を多分に取り入れた逸話的音楽の物語としての側面を考察する。物語の定義を「histoire 語られるもの」「récit 語るもの」「narration 語ること」に区別し、本研究が依拠する理論的枠組みを示す。

第三章ではヘルシュピールの逸話的音楽への影響に言及する。現状でドイツ以外における研究実績の極めて少ないこのジャンルを紹介するという意義も含めて、言葉と音響が同じ価値で扱われる実験的な聴覚芸術形式と、フェラーリ独自の音楽的物語運用や制作プロセスとの関係を考察する。

以上の知見を予備として、第四章と第五章では《逸話的なものたち》と《パリー東京ーパリ》の二曲の音楽的内容を読み解くことで逸話の理論を確かなものに深めていく。数ヶ国語を重ね合わせる言語の活用、聴取点の攪乱、反復による素材（＝言表）の拡散した「語り」、時間と場所の多重性などは本論で導かれた逸話的音楽の特徴である。また、器楽という電子音響以外のメディアとの対峙と融合の様相を分析し、複数メディアと作曲プロセスがもたらす多層的な時間構造に着目することでこれまでの理論的理解を更新する。

以上の考察の結果として、逸話的音楽とミュージック・コンクレートは相反せず、逸話的音楽はまぎれもなくミュージック・コンクレートのひとつであることが宣言された。ミュージック・コンクレートとは音を採取し媒体に吸着させ、採取した素材から加工して作る音楽であり、その素材の内容や理解の方法についてはまずは問われない。

逸話的音楽は、ミュージック・コンクレートにおいて物語的聴取を前景に置きつつ音楽的な語りを実現する音楽のスタイルである。その形式は、言語を巧みに用いながらも音響そのものの語りの可能性を押し広げ、音楽語法として拡張する。逸話的音楽における語りとは、「語るもの」（＝テキストや音響などの素材）を音楽的時間の上で「語ること」（＝反復やリズム、入れ子構造のSCRIPT、場合によって楽器など他メディアとの共存など）によって得られる言葉にならない物語である、という結論に到達した。

本論文を出発点として、録音素材の音楽的運用についての更なる洞察が期待される。また、ヘルシュピールに関するより細やかな検討やDAW環境における分析方法の洗練化も今後の課題といえるだろう。

（総合審査結果の要旨）

本論文の特徴は、リュック・フェラーリの逸話的音楽の定義を問い直し、これまで一般的に語られてきたミュージック・コンクレートとの関係に新たな提唱を行ったこと、また、フェラーリ作品の最晩年の二つの作品「逸話的なものたち」と「パリー東京ーパリ」の分析において、彼が編集で使用したProToolsのデータそのものを使ったことである。

第一章から第三章までは、逸話的音楽というスタイルの確立までのフェラーリの音楽、音響、映画の方法論からの影響や、ミュージック・コンクレートとの関係、歴史的背景、ヘルシュピールからの影響などを考察し、逸話的音楽が成立する過程と理論的枠組みを丁寧に論述している。フェラーリは映画音楽の作曲だけでなく、自身が制作・監督を行ったいくつかの作品がある。彼の代表的な作品である「ほとんど何もない」というシリーズにも映画作品があり、映像とその編集作業からの影響は大きい。また、逸話的音楽を、彼が深く関わったヘルシュピールとの関係で考察したことも注目値する。ラジオというメディアの作品であるヘルシュピールは、「言葉と音響が同じ価値で扱われる実験的な聴覚芸術形式（渡邊）」であり、ヨーロッパ、特にドイツでは重要なジャンルで、現代音楽との関係についてさらなる研究が待たれる領域である。

第四章と第五章の楽曲分析では、フェラーリ夫人であるブリュンヒルドBrunhildから提供されたProToolsのデータが活用された。これは、スコアで完成している作曲家の「自筆譜と作曲プロセスのメモ」とも言える一次資料であり、このようなフェラーリ作品の分析はおそらく世界的にも初めての試みである。フランス留学と研究のための度重なる渡仏、フェラーリのほとんどすべての資料を管理するAssociation Presque Rien（プレスク・リアン協会）やブリュンヒルドとの良好な関係を築くことでなし得た成果であり、高く評価したい。しかし、副査からの指摘もあるように、それらの分析が渡邊の新たな提唱である「逸話的音楽とミュージック・コンクレートは相反せず、逸話的音楽はまぎれもなくミュージック・コンクレートのひとつである」ことの実証として最も有効な方法であったかは、いくつかの疑問が残る。一つは、ProToolsのデータを使った分析の方法論にまだ未熟さがあること、さらに、この分析からこの結論に至るまでの論理に飛躍が見られることである。

いくつかの問題点が指摘できるが、大きな情熱を持って、これまで日本ではほとんど研究対象にされることのなかった20世紀のフランスの巨星に作曲家という立場から大胆に挑んだ論文であり、この分野の研究と

して有意義であることが審査員全員に認められた。合格とする。